

死の支配者が新たな出
会いを求めるのは間
違っているだろうか

全ての道はところてんに通ず

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

孤独な骸骨が新たな出会いをする話。

目次

新たな始まり	1
はじめての出会い（ファーストコンタクト）	19
苦悩	38
成長するエルフ	57
備えあれば憂いなし	76

新たな始まり

「……ももう、過去の遺物か……」

数百人が入ってもなお余るような広さ。大理石を思わせる白を基調とした壁には、金を基本とした細工とともに様々な文様が描かれた計41枚の大きな旗が天井のシャンデリアに照らされている。

そしてその最奥、十数段の低い階段の頂には巨大な水晶から作られたかのような玉座が据えられており、背後の壁にはギルドの紋章が施された真紅の布がかけられている。

そんなナザリツク地下大墳墓最奥の間である玉座の間に、一人の男の諦観したかのようなため息が響き渡る。

しかし、その声の主の姿は人間のものではない。

金と紫で縁取られた豪華なガウンから見える頭部は皮も骨も付いていない骸骨で、眼窩からは赤黒い光が灯っている。

ユグドラシル^{ユグドラシル}、YGGDRASIL^{YGGDRASIL}、その名を冠せられたゲームの中で最上位種のモンスターである死の支配者がそこには立っていた。

ユグドラシルのプレイヤーとして、彼は多くの金・時間を使ってきた。そしてかけが

えのない仲間たちと多くの時間を共にした。左手に持ったスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンはその象徴でもある。

しかし、今やその面影はこの場所にはない。

多くの時間を経てユグドラシルというゲームは過去のものとなった。昔は4人いたギルドメンバーも現在は3人にまで減少し、その誰もがサービス最終日の今日までここに戻ってくることはなかった。

「せめて誰か一人でも来てくれればよかったんだけどなあ」

モモンガはたった一人で玉座に座り、右手を持ち上げ時間を確認する。

23:40:07

一人でいろいろな場所を回ってはみたがかなり時間が余ってしまった。余った時間に何かしようと考えてみるが、背中に立ち込める抑うつ感で立ち上がる気力が失せてしまう。

「どうしてだよ……みんな……」

思い浮かべるのはギルメン達のこと。しかし浮かんでくるのは怒りや悲しみばかりである。

『どうして誰も来てくれないのか』『ここは俺以外にとってそんなに価値がない場所なのか』

言いたいことは山ほどあったが、そんな声を聞いてくれる者はもはや誰もいない。

たかだか20分、ただ今は恐ろしく長く感じるその時間をモモンガは思考し続ける。

そして、彼は一つの結論に至る。

「…いや、きつと誰も裏切ったわけじゃない。みんなはただ前に進んだだけなんだ。それなのに俺は、俺だけは前に進むのが怖くて、目の前に見えるものを取り繕うことしかしなかったんだ…」

ナザリツクさえ残していれば、きつとみんな帰ってきてくれる。そう思い続けてギルドの維持費を必死に稼ぎ続けてきた。

しかし、それはどこまで行っても過去にとらわれ前に進むことを恐れた自身のエゴでしかなかった。

「言えばよかったじゃないか。ユグドラシルじゃなくたっていい、一緒に遊びませんか。そう言えばよかったじゃないか。たったそれだけのことなんだ…」

モモンガの体に急速に活力が戻っていく。

時間は23:59:33となっており、モモンガが先ほどまで恐れていたナザリツクの消滅まであと1分も無い。

しかし、モモンガはもうその時をあまり恐れてはいなかった。

明日には仕事もある。ただそれが終わっても昔の仲間達に電話をするくらいは時間

はあるだろう。

きつとたち・みーさん、ウルベルトさんあたりは面白いゲームもいくつか知っているだろうし、そんな話を聞くだけでも楽しそうだ。

23 : 59 : 50、51、52 :

どうやら、そろそろ本当に終わりが近づいているらしい。

思い浮かぶのはユグドラシル、そしてナザリックでの楽しかった思い出。

23 : 59 : 56、57 :

寂しさはひとしおだが、だからこそ最後は美しく締めくくらなければならない。

23 : 59 : 58、59 :

モモンガは左手に持ったスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを掲げ、

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ!!」

そう高らかに吠えると、白く包まれていく自分の意識に身を任せていくのだった。



しばらくすると、モモンガを包んでいた浮遊感にも似た感覚が消えている。

ログアウト時に飽きるほどに感じていた、現実に戻った感覚である。

「…はあ」

先ほどはあれだけ綺麗事を並べ立てていたのに、だんだんと寂寥感が込み上げてくる。

自身が、そして仲間たちが多くの年月をかけて作り上げた一つの宝物が消えてしまったのだ。たとえ覚悟していたとしてもその事実がモモンガの心に重くのしかかる。

「…いやいや、くじけるな俺！なくなったものに執着するのは悪い癖だぞ！今できるのは現実を直視すること…！」

モモンガはそんな自分に活を入れるようにして自身の頬を叩くと、伏せていた顔を上げる。

しかしその瞬間、彼は二つの違和感を感じる事となる。

一つは、彼の体が自身の本来の姿である鈴木悟のものではなく、ユグドラシルでの仮の姿である死の支配者のものであったこと。

そしてもう一つは、自身の今いる場所が先ほどの玉座の間ではなく、見たこともない洞窟であったことである。

「…どういふことなんだ？」

サーバーの最終終了時刻である0時はすでに過ぎてている。そもそも現実に戻した実感さえあるのに体がそのままなのが理解できない。

「サーバーダウンにエラーでも起きたのか？もしくは最後までログインしていた人だけ体験できるユグドラシル2とかだろうか」

無数の可能性が頭をよぎるが、どれも決定打にはならない。

サーバーのダウンに不具合が起きているなら、GMが何か発表している可能性がある。モモンガは今まで切っていた通信回線をオンにしようとして一手が止まる。

コンソール、そして他のシャットダウン機能の一切に感触がないのだ。まるでシステムに置き去りにされた感覚である。

「本当にどういふことだよ！シャツトダウンできないとかゲームとして致命的すぎるだろ！なめてんのかクソ運営が！」

モモンガのじだんだを踏む音と憤怒の声は洞窟に空虚に響き渡る。

それと同時に、自分の口が動いておりえぐれた地面からダメージ表記が出現しないことにも気づく。

「……ここからどうすればいいんだ……。どうすればこの状況を覆せる……」

システムの一切が機能せず、ダメージ表記すらない。あまりにも自由に動かせる体。そして感じ続けている現実に戻した実感。

これらを総合して考えると一つ浮かんでくる仮説がある。

——自分はユグドラシルでの肉体を持ったまま、現実に帰還したのではないか。

あまりにも非科学的な仮説だが、なぜかパズルのピースがカチリとハマった感覚がある。

とにかくまずは情報収集だ。情報がなければ何も始まらない。

「しかし、いくらアンデッド系のモンスターは暗視が常に利いてるとはいえ明かりがないと不安だな」

コンソールが表示できない以上、今までのように魔法を選択して発動することはできない。ならば、少し恥ずかしさはあるが試してみる他はないだろう。

幸いにも、モモンガはなぜかはわからないが脳裏で魔法の効果範囲や冷却時間リキャストタイムについて把握することができていた。

モモンガは言葉を紡ぐ。

「ら、灯ライトり」

瞬間、突き出した指の先からポウ：と小さな灯りが灯る。

どうやら、コンソールが使えなくなった代わりに口頭で魔法が行使できるようになったらしい。純魔法詠唱者のモモンガにとってはあまりにうれしい変化である。

魔法の影響で明るくなった周囲を見渡せば、自分のいる洞窟は何本も枝分かれしてお

り、自分が想像していたよりもずっと広いことが理解できた。そして、

「これは……人間の死体か。装備は奪われた痕跡があるけど剣士っぽいな。なんかに喰われたっぽい跡もあるし、奪われたのはモンスターに殺された後かな」

死体は損壊がかなり酷く、とどころから中身が飛び出している。腐乱臭もする。

ここまで死体がリアルだと、ここがユグドラシルのような体験型ゲームである可能性は限りなく低そうだ。確実に何らかの法律に引っかかる。

どうやら、先ほど提唱した仮説は事実となってしまうようだ。

「さて、そうと分かった以上コレを見て時間をつぶすわけにもいかないし、さつさと出口を探すー」

そして更なる情報を求めてモモンガは立ち上がるが、そこでふと思考を止める。

自分は今、この死体を見て何も感じなかったのか？

その事実に背筋が凍る。顔があれば、その顔は冷や汗でまみれていただろう。

「思い出せ……俺はもう死の支配者オーバーロードのモモンガじゃない。鈴木悟だ！」

いつまで現実から目を背けるつもりなんだ。

仮の世界、体のいい逃げ道に入れ込みすぎた結果が、今の孤独な自分なんじゃないのか。

自分のすでに空っぽの脳にそう言い聞かせ、モモンガは遺体に手を合わせる。

〈グレイター・ラック
上位幸運〉

そして気休め程度に自身にバフを積むと、彼が掴んでいたメモに挟んであった地図の
ようなものを広げる。見る限りではここは19階層で、ここから少し行ったところに安
全地帯のようなものがあるらしい。

「すみません、少しお借りします」

彼は孤独に最後を迎えたであろう目の前の死体にそう言い残し、現状を前に進めるた
めに迷宮ダンジョンの中を歩き始めた。



「安全地帯はまだなのか？もうかなりの距離を歩いたとは思うのだが」

モモンガが迷宮ダンジョンを進み始めて約10分が経過した。いくらアンデッドには疲労がな
いとはいえ、進んでも進んでも一向に変わらない景色にモモンガはそろそろ飽き始め
ていた。

しかし、地図が合っているのならあと少しでひらけたところに出るだろう。そうすれ

ば安全地帯まで一直線である。

モモンガはその事実に関：正確に言えば頬骨をほころばせると、その場所の目印であるアーチのようなモニュメントをくぐる。

視界が開けた先は、やはり地図に書いてあった通りスペースのある広場のような場所となっていた。天井には紫色の水晶がところどころから生えており、美しい景色を作り上げている。

しかし、モモンガの目に真つ先に入り込んできたのはそんな美しい景色ではなかった。

一人の人間が、複数のモンスターに襲われていた。

いや、耳が三角形なところから襲われているのはエルフなのだろう。意識を失っており、後ろで縛られた山吹色の髪は血に染まっている。

そして彼女を襲っているモンスターだが、クマのような姿をしており、その数は3体。どうやら彼女を誰か食べるのかをめぐって喧嘩をしているらしい。だれが勝つにせよ、彼女の命はあとわずかのようだ。

どうする、この女を助けるか否か。

常に冷徹な判断を下してしまいそうになる自分の思考に吐き気を及ぼしながら、モモンガは思考をめぐらす。

現在、行動を起こすにはあまりに情報が足りない。もしかしたらこの世界ではモンスターが正義なのかもしれない。下手なことをして未知の勢力に敵対されたらこの世界での生存が危うくなるだろう。

それに、元の世界でもこんなことはよくあった。弱者は強者に淘汰される。当然のことである。

しかし、モモンガの心の中には一つの言葉が浮かんでいた。

——誰かが困っていたら助けるのは当たり前。

あの人の、この言葉がなかったら自分はもつと狭い世界で死んだように生きていた。ならばこの言葉を思い出した以上、助けに行かないわけにはいかないじゃないか。

ふうとモモンガは溜息を吐きだす。そして苦笑するように笑みをこぼすと、杖をしっかりと握る。

「たつち・みーさん、あなたから受けた恩を返します。：どちらにせよ、この世界での戦力の把握は最重要課題でしたしね」

ここにいないかつての恩人に言葉を残すと、モモンガはモンスターの一匹に手をかざし、魔法を発動させる。

グラスフ・ハート
〈心臓掌握〉

その瞬間、モンスターの一匹は声を上げる暇もなく崩れ落ち灰に帰する。

『グウツ!?…グオオオオオオオオ!!』

残された2匹は突如として同族が殺されたことに一瞬動揺していたが、瞬時に下手人であるモモンガに向かって突進を開始する。

先ほどの魔法は、モモンガの得意な死霊系即死魔法であり、常時発動系特殊技術の影響を大きく受けている。これでは目の前のモンスターの素の強さを図ることができない。

ならば、次は別の魔法を使うべきだろう。

「せっかくの機会だ。お前たちには実験台になつてもらおうぞ?」

モモンガはすでに目の前に接近しているモンスターたちに向け、そうつぶやく。

〈飛行〉〈看破〉

そして宙に浮くことで彼らの爪を回避すると、彼らの大方の強さを開示、殲滅に最適な魔法を組み立てる。

対象は獣、装備は無し、レベルは20そこら、ならば行使する魔法もおのずと見えてくる。

〈魔法二重化・火球〉

二つの魔法陣から放たれた火球は、突っ込んできた彼らの真正面で炸裂し、一瞬で身体全体を炎で覆いつくす。

そして彼らは燃え尽きるように体を瓦解させると、石のようなものを残して消失した。

「予想はしていたが……やはり弱いな。いくらギルド武器で強化されている魔法とはいえ、こんなに簡単に死ぬとは……」

念のため追撃の準備に入っていたモモンガは、足元のドロップアイテムを眺めながらそうつぶやく。

彼らの脆弱性を知ること、張り詰めていた気が霧散する。もちろんこのモンスターのみが特別に弱い可能性はあるので、いざとなったら即座にグレート・テレポーターアクションへ上転移グレート・テレポーターアクションが行使できるように準備しておく。

そしてさらなる防衛手段として、自らの特殊技術スキルを発動させる。

——中位・上位アンデッド作成 デスナイト 死の戦士、アイボールド・コープス 隻眼の屍——

作成するアンデッドをこの二体にした理由だが、死の戦士デスナイトは自己の防衛のため、そして隻眼アイボールド・コープスの屍は周囲の警戒のためである。

しかし、どうやら召喚の方法が元の世界より少々異なるようである。

黒い霧が中空からにじみ出ると、モンスターから落ちた石に溶け込んでいく。そして魔石が膨れ上がるようにして変形すると、それぞれの形をとったのだ。

死の戦士はボロボロの漆黒のマントをたなびかせながら、アイボールド・コープス 隻眼の屍は肉塊の中にある

目をこちらに向けて、静かに命令を待っている。

そして、その瞬間感じた召喚されたモンスターとのつながりを操るようにしてモモンガは命令を下す。

「死デスの戦士ナイトよ、ここら近辺にいるモンスターを殺せ、人間は殺すな。 隻眼アイボールド・コルズの屍、お前は私の周囲を飛び索敵せよ」

「オオオアアアアア!!」 「oooooooooooooooo!!」

命令を受諾した二体は聞く者の肌を泡立たせるような咆哮を上げるとお互い別々の方向に駆け出して行ってしまう。

失敗だ、ここは自分の知っているユグドラシルではない。 召喚したモンスターに与えられる命令の自由度を見誤っていた。

「とはいえ、盾役が主人を置いて行ってどうするよ。 まあ命令したの俺だけどさ？」

モモンガは頭をポリポリと掻きながら残った少女の所へ足を運ぶ。

先ほどは遠目からだだったので見えなかったが、どうやら背中にも爪で切り裂かれたような傷がある。 呼吸は弱々しいが、生きてはいる。

モモンガはそれを確認するとアイテムボックスから一本の下級マイナー・ヒーリングポーション治療薬を取り出し、彼女に撒きかける。

傷が消えたところから、彼女は先ほどの熊型モンスターとあまり変わらない強さであ

ると理解することができた。

「それじゃあ、起きるまで少しばかり待つとするか」

そう言つて偶然にもポーシヨンの近くにしまわれていたルービツクキューブを取り出すと、モモンガはなかなかそろわない面に四苦八苦しながら時間をつぶすのであった。



その日は、レフイーヤ・ウイリデイスにとつて最悪の一日であつた。

いつものようにダンジョンの探索へと繰り出すこととなつたレフイーヤ、しかし今回は団長達が別件で忙しくしていたため、レベル2、3の団員数人とともにダンジョンに赴いたのだ。

突発的なパーティだったが、順調に進んではいた。途中までは。

初めは些細なことからだつた。組んでいるパーティメンバーの一人がレフイーヤのことを馬鹿にし始めたのである。

嫌われる心当たりはある。自分がまだ未熟なレベル3にもかわからず、団長や幹部の方々に目をかけてもらっていることだ。彼の罵詈雑言にはそのことへの怒りと嫉妬が顕著に出ていた。

それだけならまだ我慢できた。しかし、苦し紛れに彼が発した一言がレフィーヤの逆鱗に触れた。

『お前のような未熟者に後衛を任せるなんて、前線に立つ奴らの頭はイカれてるんだろうな!!』

自分だけならまだいい、だけど尊敬し背中を預ける仲間たちを嘲るのだけは許せなかった。

それを皮切りに始まった口論は周囲の仲間たちを巻き込み、もはや連携が不可能になるくらいまでお互いの関係は悪化した。そのため、レフィーヤたちのパーティはダンジョンから引き返すことになったのである。

しかし、ここでさらなる不幸が起きた。撤退の途中でモンスターが異常発生したのだ。

未熟な連携、そして経験の低さ、到底まともに太刀打ちできないパーティは少しずつ瓦解していき、一人、また一人と仲間が殺されていく光景にレフィーヤの意識は閉ざされた。

あれからどれほどの時間がたったのだろうか。誰か一人でも生き残れた人間はいるだろうか。

レフイーヤは、自らの生存をもう期待してはいなかった。あれだけ余裕のない状況で気絶してしまつたのだ。おそらくすでにモンスターたちの腹の中だろう。

しかし、そんな予想とは裏腹にレフイーヤは意識を取り戻す。視界には先ほど倒れた場所である広場の天井が映っており、服はボロボロなのに傷がないところから、自分は治療され寝かされていることに気づいた。

「いったいどこの親切な人が助けてくれたのだろうか。まずはお礼を言わないと。」

「あ、あの！助けていただきありがとうございます。」

レフイーヤは自身に背を向け何かの作業をしている大柄な者に感謝の言葉を紡ごうとする。しかし、次の瞬間彼女は本来であれば褒められるべきその行動を本気で後悔した。

振り返つた彼には人間には存在しているはずの顔がなかった。

いや、正確に言えばその表現は適切ではない。彼の顔に当たる部分に存在していたのは肉や骨が削げ落ちた骸骨だった。目に当たる部分からは赤い光が灯っており、彼女の生命を否定するようにこちらを睨みつけている。

降つて湧いた希望から絶望の底にまで叩きつけられたレフイーヤにとってそれは、自

らの魂を刈り取りに来た死神にしか見えなかった。

まるで、自らの体が呼吸を忘れてしまったかのような感覚に陥る。身体は地面に縫い付けられたかのように動かない。そんな彼女の状態を知ってか知らずか、死の象徴はレフィーヤに向かい一歩、また一歩と歩を進めていく。

ーもう無理だ、私はここで死ぬ。

そんな思いがレフィーヤの心の中を支配する。

そうして彼女は自らの運命に乾いた笑みをこぼすと、来るであろう死を受け入れた。

はじめての出会い（ファーストコンタクト）

モモンガが彼女の意識回復を待つて数十分が経過しただろうか。

彼はすでにルービックキューブをそろえ終わっており、アイテムボックスに入っていたさまざまなアイテムの点検を行っていた。

「これはドラゴンの血、これは何かのイベントアイテム、これはガチャの外れアイテム、これは…ゴミアイテムだな、よし」

モモンガはボックスからアイテムを取り出してはそれを少しの間眺め戻す作業を繰り返していく。ちなみに最後に彼が乱雑に投げつけたそれは、怒っているのか笑っているのかわからない表情が彫り込まれた嫉妬マスクと呼ばれる装備品である。

この装備品だが、クリスマスのある特定の期間ユグドラシルにログインしていると強制的に手に入ってしまういわば呪われた武器なのである。ちなみにたち・みーは持っているなかった。みんなで囲んで3回PKした。

そんな過去のバカ騒ぎを思い出し、モモンガに小さい笑みがこぼれる。

しかし、それと同時にモモンガの胸の中に現れたのは決して小さくない不安感だった。

現在モモンガが遭遇しているこの転移だが、当然のことながら不確定な部分が多すぎる。現状では転移の目的やその方法、そして帰還する方法が存在するのかすら分かっていないのだ。

まず先んじて行わなくてはならないのは、この未知の世界についての情報獲得である。

「そのためにも、とりあえずはこの迷宮ダンジョンから脱出しないとな」

道にたびたび転がっている人間らしき死体の服装を見たところ、一番近いところであろう中世を思わせるような装飾の施された服装をしていた。ならば、マップメモに書いていない一階層より上はそれ相応の加工技術を持つている都市があるのだろう。そこなら人も情報も多くあるはずだ。

モモンガがそう思い、迷宮ダンジョンから安全に、そして多くの情報を持つて地上に到着するプランを構築していると、後ろから布がこすれるような音が聞こえる。察するに後ろで寝かせていたエルフの少女が目覚めたのだろう。

「ああ、目覚めたのか。生きていたようで何より。どうだ、どこか痛むところはないか？」

モモンガは少女のほうに振り返り、できる限り警戒心を与えず、それでいて違和感を持たせないように『鈴木悟』ではなく『モモンガ』としての仮面マスクをかぶり話しかける。

彼女はこの死体が多い迷宮ダンジョンの中でも貴重な生存者だ。できる限り多くの情報を仕入れ、有効にコミュニケーションを行いたい。敵対関係なんてまっぴら御免だ。

しかし、モモンガが最大限慎重に言葉を選んだにもかかわらず、エルフの少女からの返答はない。起きたばかりだからまだ意識が回復しきっていないのかもしれない。

「どうしたのだ。まだあまり本調子ではないならまだ寝ていても構わないぞ」

そう言っただけでモモンガは少女を再び寝かしつけるために彼女に近づいていく。しかし、彼女が少女と顔を合わせたとき、その様子が明らかにおかしいことに気づく。

少女の顔は恐怖と絶望に染まっており、身体は凍傷にあつた人のようにガタガタと震えている。そしてモモンガが彼女に近づいていくごとに、彼女の目が早回しのビデオのように急速に色を失っていくのだ。

「ーもしかして、あのモンスターには呪いを付与する効果もあつたのだろうか。」

万が一のことも考え、モモンガは少女に向けて手を伸ばし思いつく限りの探知魔法をかけてみるが、それらしき負荷効果バッドステータスの痕跡はない。

そしてその瞬間、モモンガは自身が犯した致命的な過ちを自覚する。

ユグドラシルというゲーム内において、アインズのこの姿は恐怖の対象ではなかった。むしろアバターのクオリティが高いと賞賛の対象だった。

しかし、転移したこの世界ではどうだろう。おそらく人間が地上で暮らしており、そ

の命を奪うためモンスターが襲ってくる。さらに死んだらそれで終わりというこの世界において自分はどうか映るだろうか。答えは当然、『邪悪な化物』である。

モモンガはその事実にとどり着いた瞬間、瞬時にユグドラシル時代にキャラ作りのため付与していたあらゆるエフェクトをオフにする。ついでに接触時にダメージを与えてしまう可能性を考えて、特殊能力の中にある負の接触ネガティブタッチを解除する。

さて、これからどうする。

少女はすでに自分の骸骨の顔を見てしまっている。今更顔や手を隠しても意味はないだろう。

コントロール・アムネジア
記憶操作を使うか？ いや、事前情報も無しに記憶を改ざんするのはあまりにも危険だ。

いつそのこと殺してしまえば…

「…馬鹿か俺は。それじゃあ本当に化け物じゃないか」

数多くの考えが浮かんでは消えていく。

しかし、元の世界では他人の感情の機微などほとんど考えなくてもよかつたモモンガにとって、今直面している状況はまったくの未知である。有効打になりそうな打開策はなかなか出てこない。

なんにせよ、まずは会話を成立させなければならぬ。モモンガは少女に手をかざ

し、一つの魔法を発動させる。

ファイアー・オブ・アフエクション
 〈感情の炎〉

すると、空中にさまざまな色彩を放ちながら煌々と灯る炎が現れる。そしてその炎が少女の体へと入っていくと、先ほどまでは死体のようであった彼女の顔に色が戻っていく。

この魔法は、対象に任意の感情状態を付与できる炎を生み出すという魔法であり、味方にバフとしてかけてもよし、相手にデバフとしてかけてもいいという一度に二度おいしい魔法なのである。

しかし、ユグドラシル内で感情バフ・デバフを大きく受けるのは踊り子などといった後衛職がほとんどであり、射程距離が意外に短いこの魔法は正直使えない魔法だと思っていたのだが……わからないものだ。

「今、魔法で君の精神に防御をかけておいた。これで喋れるようにはなっただろう」少女はしばらくの間何が起こったのか分からないかのように放心していたが、やつとモモンガの声が届いたのか目を見開くと、近くにあった杖を取り瞬時に距離を取る。その瞳には確かな敵意が見えていた。

まずはこれで一步前進、問題はここからどうしていくかである。

彼女がこちらに向かいほぼ無意識にも敵意をむき出しにしている以上、この世界でい

うモンスターというものはユグドラシルでいうところのアクティブモンスターと同じような存在なのだろう。

チャームスピアシース
全種族魅了を使う手もあるが、そんなことをすればあとで記憶操作をおこなう手間もかかるし、万が一彼女の仲間に魔法を探知できる存在が居た場合、要らない禍根の材料となる。

それにこれはピンチでもあり、チャンスでもある。もし仮に、モンスターが言葉を交わすことがこの世界の常識であつた場合、モモンガはいつもの敵認定されて戦闘待たなしというところだろう。

しかし現状はどうだろうか。確かに少女は敵意を向けてはいるが、その敵意の中には困惑や未知への恐怖が見え隠れしている。だとしたら付け入るスキはいくらでもある。「待て、落ち着くんぞ。言っておくが私は他のモンスターのようには君を殺しに来たのではない。自己の知性でもって君を助けたんだ」

「…モンスターが喋るなんてあり得ない。というか、その言葉を信用するほど私が愚かだとしても？」

彼女は、持っていた杖を先ほどよりも高く上げその先端をモモンガに突きつける。

メモに書いてあつた文字が読めたところから何となく予想はしていたが、やはり言葉が通じている。

この世界においてモモンガが重要視していた言語という問題がなくなったことに小躍りしたい気分だが、状況が状況なのでローブの下でこぶしを握り締める程度に留める。

「もし仮に、あなたが本当に私を助けてくれていたのだとしたら感謝しなきゃいけません……だけど、私は冒険者で、あなたは倒すべきモンスターなんです！」

「状況を整理してみてくれ。私が今まで君が遭遇してきたモンスターと同じだったなら、気絶していた君はとっくに死んでいるはずだろう？」

「それはっ……そうでしょうけど……でも！」

「それに、殺すのが目的なら君の精神に守りをかけたりなんてしない。今必要なのは暴力ではない。理解、そして会話なんだ」

この世に無償の施しを容認する者は少ない。人に親切にした者は心のどこかでその恩に報いてくれることを期待する。しかし、人に親切にされた人間もまたその恩に名に返せるものがないか考えるもの。それが心優しい人間であるのならなおさらだ。

そして短いコミュニケーションの中でも理解できた。この少女は善人である。こんな理解のできない怪物に対し言葉を交わし、攻撃に躊躇を見せている。

「なにも友人になろうってわけじゃない。私が要求するのはここでは襲わないという約束たった一つ、そして提供できるのは君の身の絶対安全、そして私が持ちうる情報だ」

『クリエイト・コントラクト
契約書作成』

モモンガはそう言い終わると、空中に指で四角形を描き一枚の紙を作り出す。そしてその紙を彼女に差し出した。

「この契約書には、私が君に提供できる身の安全と情報の提供についての記載がされている。君が約束を破ってもなんら問題はないが、私がこの契約を破れば私の四肢はもげ、爆散するようになっていく。これで、この場は納めてもらえないだろうか」

「四肢が…爆散…？」

少女は今なお震える手で契約書をつかみながら、契約書とモモンガの顔を交互になんども見つめる。

もちろん、そんな魔法はユグドラシルには存在しない。モモンガが行ったのはクリエイト・アイテム
道具創造を使った何の力もない紙切れの作成である。

得体の知れない化け物が、化け物自身が作り出した契約書で明らかに自分側に有利な取引を持ち掛けている。通常の判断なら相手の考えを警戒し取引を断るだろう。誰だつてそうする。モモンガだつてそうする。

しかし、モモンガにはこの少女が自分の取引を受けるだろうという確信があった。

少女を観察してみればわかることだが、彼女の装備は一人で来たというには異常なほど少ない。おそらく荷物持ちのような要員が居たのだろう。さらにその少ない装備も

ひびが入っていたり、破損しているものがほとんどだ。

彼女は間違いなく疲労している。肉体は回復薬ポーションで回復したとしても、精神はモモンガとの一件もあつて限界に近いだろう。

だからこそ、そこに一本の糸を垂らす。身の安全という糸を。

本来であれば吹けば飛ぶような嘘。しかし、人間は墮落を正当化できるなら怪しいウソにも簡単に引つかかる。

「本当に……本当に保障してくれるんですね。私の安全を」

少女は震える手で契約書の欄に名前を書き、モモンガに向かいそれを差し出して行く。その眼にはもはや警戒心は残っておらず、ただ自らの安全を切望する少女の顔がそこにはあつた。

モモンガは、一介の営業マンである自分の立てた計画が非常に良い結果でもって終結したことに喜びを感じながらも、あくまで契約が結ばれたことに安堵するような様子を演じる。

「ああ、約束するとも。この私、モモンガの名に懸けてな」

そして少女から受け取った契約書を懐に入れると、しゃがむことで視線をあわせつつ笑みを隠しながらそう宣言するのであつた。

「さて、あらためて自己紹介から。私はモモンガ、見ての通りアンデッドの魔法使いだ」
「…レフイーヤです」

迷宮の19階層にダンジョンの中とは思えないほどの静けさが広がる。

現在、モモンガとレフイーヤはモモンガが出現させた丸テーブルに向かい合うように座っている。そしてレフイーヤの方にはまだほのかに湯気を立てている紅茶が添えられていた。まだ少し警戒しているのか、飲む様子はない。

確かにモモンガは情報の入手のために彼女を生かした。だが、『鈴木悟』として死にゆく人間を助けたかったという気持ちがないわけではないのだ。そこまで警戒されると少し傷ついてしまう。

それに、そろそろ『モモンガ』の演技にも疲れてきたところだ。早いとこ友好関係を築いて素で話したい。

モモンガは与えてもよい情報と、よくない情報を頭の中で整理しながら話題を考へる。

「そう、だな。まずは誤解を解くことから始めよう。私は君たちがいつも相対している迷宮ダンジョンの壁から生じたモンスターではないんだ」

「迷宮産のモンスターではないってことは…もしかしてオラリオの外から来たんですか!? いったいどうやって!」

レフィーヤは興奮のあまり椅子から立ち上がる。

やはり、この迷宮ダンジョンの上には都市、もしくは国のようなものがあるらしい。

「そうだな、説明したい気持ちはもちろんあるが残念ながらそれは難しい。なぜなら私も気が付いたらユグドラシルという場所からこの迷宮ダンジョンの中にいて、状況が把握しきれないんだ」

「そのユグドラシルって国はわかりませんが…魔法でここまで飛ばされたのであれば呪文を唱えた術者が近くにいたはずですよ。そういった人に心当たりは?」

「…申し訳ないが、見当がつかない」

ユグドラシルの中であればワールドアイテムによる転移も考えられたのだが、今回はゲームであるユグドラシルから現実の世界である異世界に転移が行われている。ワールドアイテムにはあまりにも力のベクトルが違いすぎる。

「念のため、君の思う魔法と私が思う魔法について擦り合わせをしておきたい。もちろん違いは少ないと思うが、万が一違いがあった場合それが犯人の特定に繋がるかもしれない」

ないしな」

そしてモモンガは、先程のレフィーヤの発言の中にあつた相違点について追求する。

レフィーヤは呪文を唱えた者はいたかと質問してきたが、もしこの世界の魔法がユグドラシルのものと同色がないならそんな質問はしないだろう。

なぜなら、ユグドラシルの魔法を使う自分は異世界に転生してもなお魔法の詠唱行為を必要としていないからである。そしてそこから推察できるのは、この世界にはこちらとは違う独自の魔法のルールがあるということだ。

「えっと、私が思うっていうか、魔法っていうのは自分の中にある魔力を使って呪文を唱えることでその人ごとにいろいろなことができるっていう感じなんですけど……あ、レベルが上がったり、魔導書を読んだりすると手に入ることが多いみたいです。それからエルフは魔法の扱いに長けている方が多い傾向があるんですけど一説によつては恩恵がなくても魔法を行使できる同胞が居たという話があつて……」

レフィーヤは最初こそ遠慮したような話し方をしていたが、徐々にそのペースを上げていく。声色もこころなしか高くなっていく。

杖を持っているところからして魔法使いのようだし、やはり自分の得意分野の話をするのは楽しいのだろうか。

「なるほど……やはり、私の思っている魔法とあまり遜色は無いようだ。時間を奪つてし

「まっつて申し訳ない」

「あ、いえ！私こそ関係のない話をしてしまつてごめんなさい！」

「いやいや、レフィーヤが謝ることは何もない。それに、私は君の話に非常に価値を感じている。情報が多ければ多いほど、私は真実に近づく可能性を高めることができるんだ。もし君が良ければだが、いろいろな話を聞かせてくれないか？」

「は、はい！わかりました！」

モモンガの問いかけに対し花のような笑顔を浮かべたレフィーヤは堰を切ったかのように話しだし、モモンガはその話を驚きや感嘆、時には笑いをもつて受け止めていく。

さらにモモンガはその話の中に出てくる神、フアルナ恩恵、ステイタス、それ以外にも多くのこの世界独自の情報を整理していく。

当初、モモンガはこの世界は元の世界の読み物のような異世界であると考えていた。しかし、この世界にステイタスやスキル、エンチャントといったゲーム用語が存在している以上、自分以外にもユグドラシルから転移してきた者たちがいるのかもしれない。彼らを見つけ出すことができれば、この世界の理解に大きな進展を与えるだろう。

当面の目標を固めそのためにすべき行動を組み立てていると、モモンガの脳裏に鈴のような音色が鳴るとともに、いくつかの光景が映し出される。どうやら、周囲を偵察していたアイボールド・コープス屍から伝言のメッセージのようなものが届いたらしい。

「…なるほど。分かった、では引き続き監視を続けてくれ」

モモンガは脳内のそれらを確認すると、アイボールド コーンス 隻眼の屍に再び命令を出し、モモンガの突然の発言に目を白黒させているレフイーヤの方へと向き直る。

「どうやらこの先の安全地帯に、セーフティゾーン 周りの冒険者とはレベルの違う大部隊が接近しているらしい。ピエロのようなエンブレムの書かれた旗を背負っていたらしい。もしかしたら君の仲間なんじゃないか？」

「確かにそのエンブレムは私たちロキファミアの物です。リヴィラの街の人たちより強いってことは…もしかしてアイズさん!? 私、行かないと!」

レフイーヤはそう言つて飛び上がるように椅子から立ち上がると、上に繋がる道へと走つていこうとする。しかし、彼女の傷は完全には回復しきつてはいなかったのだろう。彼女は数歩進んだ後に苦し気に声を上げるとその場にうずくまってしまう。

「はやる気持ちは分かるが無理はしない方がいい。それに、君が上に行くというなら私も同行しよう。契約に基づき君の安全を確保しなければならぬからな」

「それは助かりますが…あなたはモンスターですから、アイズさんたちに出会ったら攻撃されちゃいますよ?」

「なんだ、私のことを心配してくれるのか?」

「ち、違います! 私はただあなたと一緒にいるところをファミアの仲間に見られると

いろいろと面倒なことになるなと思っただけです！」

「そうだな。だが安心してほしい、私が同行するのは安全地帯の手前までさ。そこまでいけば契約も成立させられるだろうしな」

モモンガは椅子から立ち上がり、出していた椅子とテーブルをストレージの中にしま
う。

その瞬間、迷宮ダンジョンが地響きとともに鉄の軋むような唸り声が響き渡る。

迷宮ダンジョンの怒号であろうそれは数十秒に渡り響き続け、それが収まったかと思うと今度はこのフロアの壁全体に亀裂が走る。

おそらくこの現象は迷宮ダンジョンにおけるモンスターの誕生、それもこの数は異常事態と呼ばれるものなのだろう。広場の奥に続く道にまで亀裂が入っていないところを見るに、異常事態はこの場所のみで発生しているらしい。

しかし、なぜこんなことが起きているのだろうか。レフィーヤの話によればこのような異常事態は冒険者が疲弊していたり、モンスターが出てこないよう長時間壁を傷つけたりしなければ発生しないはずー

そこまで考えたあたりで、モモンガはとあることを思い出す。

たしか先ほどまで使っていた椅子とテーブルは『静謐の茶会』というアイテムで、その効果は設置した場所から半径50メートルのモンスターのポップを封じるといっても

の。もし仮にその効果が迷宮にも適応されたのであれば、それは異常事態発生イレギュラーのトリガーにはならないだろうか。

「も、モモンガさん敵が！それにあんなにいっぱい早く逃げましょう！」

レフィーヤは全滅のトラウマを刺激されたことで多少混乱してはいたが、すぐに正気を取り戻すとモモンガに向かいそう叫びモモンガの袖を引っ張る。

しかし、モモンガはその腕をそつと引きはがすとモンスターの群れへ向かっていく。

「そんな、何をするつもりですか！あの量のモンスターを相手にするなんて無茶です！戻ってきてください！」

「そのダメージでは十分に逃げることはできないだろう。それに、勝算なら十分にある。安心してそこで見ているといい」

モモンガはそう言い終わった後、壁から這い出てきた何十ものモンスターを見据える。

複雑な心境だ。これだけのモンスターを前にしているのに恐怖が一切湧いてこない。それより先に出てくるのは傷を回復できる手段があるにもかかわらず、マッチポンプまがいのことをしていることへの罪悪感だ。

どうやら、精神の非人間化は依然として進行しているらしい。今回はプラスに働いているようだが、いつかその変化が大きな失敗を招くのではないかと不安に駆られる。

しかし、いつまでもそんな感傷に浸っているわけにもいかない。壁から這いずり出たさまざまな外見のモンスターたちはモモンガの姿を見つけると、まるでターゲットを見つけたかのような速さで一直線にこちらへと向かってくる。

どうやら迷宮はモモンガを排除すべき異物と認識したらしい。

「まあどのみち彼女を助けた時点でどこかの組織と敵対することは覚悟していたんだ。悪いが蹴散らさせてもらおうぞ」

モモンガは左手を振るい、杖を地面に突き立てると魔法を発動させる。

〈ネガティブ・パースト負の爆裂〉

大気が震える。

爆裂するかのような重低音とともに、漆黒の光の波動がモモンガを中心とした周囲を一気に飲み尽くす。漆黒の波動に飲み込まれたモンスターたちは瞬く間に粒子状に飛散し、魔石を残すことなく消滅していく。

そして、数刻の衝撃の後に残されたのはモモンガとレフイーヤ、そして平地となった地面だけであつた。



18階層、『迷宮の楽園』
アンダーリゾート
ダンジョン

平時であれば迷宮の中でも比較的和やかに時間が進むその場所では現在、戦場もかくやという空気間で中継地点の設営が行われている。

そして、そのテントにはピエロのようなイラストが記載されたロキファミアの旗が高々と張られていた。

「のうフィン。いくら将来有望な団員の搜索とはいえ、やはり19階層あたりにこんな大部隊は過剰なんじゃないか？」

そしてその中心であるひとときわ大きなテントで、二人の幹部が顔を向き合わせる。

一人はがっちりとした体格に、背中に背負った戦斧が特徴的なドワーフ。

そしてもう一人は先ほどの男とはまったくの真逆な小さな体躯の小人族であった。

「別の任務中だったワシまで連れ出しおつて、これが終わったら一杯おごつてもらおうぞ！」

「いいとも、なんならこの仕事が終わった後のガレスの酒代は僕持ちでも構わないよ」

「そりゃあいい！…で、どうなんだ。おぬしがここまでの大部隊を編成したということは何かあるんだろう？」

そうガレスが尋ねると、フィンは少し悩むような様子を見せる。

「…いや、今のところは何の確認もないただの勘だ。しかし、今回はそのレベルが尋常じゃなくてね」

そう言つて、フィンはガレスに自身の親指を見せる。

その指は誰が見ても顔をゆがめるほど痛々しくねじ曲がつており、根元の部分には血がしみ込んで真っ赤になった包帯が巻かれていた。

「エリクサーをかけてもすぐまたこうなつてしまう。命の危機でも疼く程度だったこの指がこんなことになるということは、この局面は僕たちファミアの、いや、もしかしたらオラリオ全体の命運を左右するのかもしれないね」

フィンは右手の槍を握り締め、一筋の冷や汗を流しながらそう呟くのであった。

苦惱

トリプレットマジック
 <魔法三重化 黒曜石の剣>

「グギヤアアアアア!!」

モモンガが出現させた三本の剣が、壁から現れたモンスターたちを蹴散らしていく。

現在、モモンガはレフィーヤを迷宮^{ダンジョン}で数少ない安全地帯^{セーフティゾーン}である1-8階層へ送るため、上の階層へとつながる道を突き進んでいる。

「しかし、1階層上がるだけでもかなりの手間だな。もう1時間以上歩いているのに全く景色が変わらないんだが」

「ここら辺はまだまだ短い方ですよ。下の階層、それこそ『深層』にもなってくると一つのフロアを歩いて横断するのに半日はかかりますからね」

レフィーヤはそう言い終わると溜息を吐く。今までの迷宮探索^{ダンジョン}での苦労を思い出しているのか、心なしか若干目が死んでいた。

「深層というのはたしか、レベル5か6でないと死の可能性が高い危険な場所のことだったか。レフィーヤはレベル3なはずだろう? どうして深層についてそんなに詳しくんだ?」

「私は少し特殊な事情があつて、よく高レベルの方たちと一緒に遠征に行かせてもらつてゐるんです」

「ほう、つまりレフィーヤにはレベル5に並び立つほどに優秀な素養があるということか。それは素晴らしいな」

おそらく、レベル3の時点で深層に通用するほどの強力な魔法、もしくはスキルを持つてゐるのだろう。

詳しく聞きたいところだが、どうやら他者にステイタスやその他の情報を問いたただくことはマナー違反に当たるとらしい。だからこそ、レフィーヤも言葉を濁しているのだ。

まあ、褒めるくらいなら特に問題にはならないだろう。モモンガはそう思い、レフィーヤに賞賛の言葉を贈る。

「…素養とは、ちよつとだけ違うかもしれませんが。どちらかといえば、私はアイズさんやリヴェリア様の足を引っ張つてしまうので…」

しかし、賞賛を受けた側であるレフィーヤは花がしぼんでいくようにその表情を暗くしてしまふ。

どうやらモモンガは地雷を踏んでしまったらしい。

ただ、モモンガはその悩みに強い理解を示す事が出来た。なぜなら、その感情はモモンガがユグドラシルでよく経験していた感情だったからである。

モモンガは、ユグドラシルの中でたち・みーという存在にずっと憧れの感情を抱えていた。

それは、単純に強さだけではない。彼の立ち振る舞い、そして何より彼の仲間まじめ上げる強いカリスマ性に憧れ、彼に並び立ちたいと考え続けていた。

しかし、今のモモンガならいざ知らず、昔のモモンガは死者の大魔法使いエルダーリッチという即死攻撃以外正直あまりパツとしない種族を使用していたせいも、仲間たちの足を引っ張ることが多かったのだ。自信も付かず、落ち込んだことも多かった。

状況が昔のモモンガと同じであるならば『種族に特にこだわらないならドラゴン族に転生すればOK!』と軽いアドバイスができたのだが、今回はそういうわけにもいかないのだろう。

モモンガは沈黙の中でレフイーヤにかけ言葉在必死に考え、そして口を開く。

「そう、だな…レフイーヤは、自身の至らぬ点についてどんな所を考えているんだ？」

「…私、モンスターが近くに来ると怯えてしまって、魔法を中断してしまうんです。今回のことだって、私に勇気があれば…私が気絶しなければ状況は改善されて、みんな殺さなくて済んだはずなんです」

レフイーヤは顔を伏せ、こぶしを握り締める。血が流れるほどに握りしめられたこぶしには、強い後悔の念が現れていた。

「どうやら、レフィーヤの心には“仲間を殺してしまった”という後悔が深く刻み込まれているらしい。半分人間をやめてしまったモモンガには推し量ることは難しいが、理解はできる。」

「すでに起きてしまったことは、どんな方法を使っても覆すことはできない。自分を責めたところで残るのは罪悪感か後悔くらいなものだ。重要なのは、次にその失敗を繰り返さないために失敗から何を学ぶかだ」

モモンガは知っている。過去にとらわれ、進むことを諦めた者に待つ結末を。その孤独を。

だからこそ、レフィーヤにはその失敗を踏みしめてもう一步前に進んでもらいたいのだ。

「レフィーヤは自分の至らぬ点を自覚している。あとはそれを強さに変えていくだけだ」

「…そうですね。モモンガさんの言う通りです。いろいろ助言をしていただきありがとうございます。うございませすー！」

レフィーヤはそういつて深々と頭を下げる。その顔にはもう過去を悔やむような後悔の念は見られず、前をまっすぐに見据える少女の姿があった。

「いやいや、大したことはないとも」

本当に大したことではない。モモンガがしたのはただのごまかし、言ってみれば詐欺のようなものである。

しかし、現実の世界では小学校を卒業しただけのモモンガにとってこれ以上の慰めの言葉は浮かんでこない。あくまでレフイーヤにこの助言が通じるのは、この偽りの威圧感+威厳たつぷりな外見が一役買ってるせいである。

そうしてモモンガが自身の学のなさに人知れず落ち込んでいると、またもや壁から割れるような音が響く。

「どうやらモンスターが出現するようだ。私はモンスターを押さえておくから、レフイーヤは魔法を使ってくれ」

「は、はい！わかりました！」

レフイーヤはそう言うと、持っていた杖を前に構える。

先ほどまではモモンガが敵を殲滅していたが、情報収集の一環として今回はレフイーヤに任せる。

欲を言えば、彼女が第一級冒険者と肩を並べて遠征に行く理由も知ればいいが、それは贅沢というものだろう。

そうこう考えているうちに、壁の中にいた三体のモンスターはこちらに向けて侵攻を開始している。

【解き放つ一条の光、聖木の弓幹（ゆがら）。汝、弓の名手なりー】

それと同時に、レフイーヤも魔法の詠唱を開始したようだ。足元には魔法陣が現れており、光の粒子が周囲に立ち上っている。魔力の量を見るに第四位階クラスの魔法だろう。弓という単語が目立つ詠唱文から、おそらく一点集中の矢のような魔法だと予想できる。

ならばモモンガにできることは、モンスターをレフイーヤから引きはがしつつ彼らを一点にまとめることだ。

〈浮遊〉

モモンガは空へ浮き上がると、床をすべるようにしてモンスターの周りを飛び回る。

モンスターはそんなモモンガを捕えようと必死に爪や牙を振るうが、それらはすべて空を切る。

それもそのはず、^{フライ}浮遊は、モモンガがもつとも得意とする移動手段なのだ。

^{グレイター・テレポーション}上位 転 移や転移門は安定して長距離を移動できる利点はあるが、^{ディレイ・テレポーション}転 移 遅 延 を使われたり、^{エクスプロージョン}爆 撃 地 雷を置かれるなどの対策もまたされやすい。

そのため、ユグドラシルでの魔法詠唱者のプレイヤーたちは^{フライ}浮遊を重宝し、廃人の一人であるモモンガは^{フライ}浮遊の魔法を極めに極めている。この程度のモンスターの攻撃を避けるのは容易いことなのだ。

さらに、モモンガはただモンスターの攻撃を回避していたわけではない。回避の方向を調節することで少しずつモンスターの位置を一か所に集めていた。

「…そろそろだな。レフィーヤ、いけそうか？」

「ー狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢」大丈夫です！いけます！」

モモンガの言葉に対し、レフィーヤは大きくうなずくと煌々と光る杖をモンスターに向ける。

その時初めてモンスターたちは自分たちが一か所に誘導されていたことに気づき逃げ出す、その時にはもう何もかもが遅かった。

「^{アリオ}光散 アルクス・レイ！」

その言葉とともに杖先から放たれた光の矢は、逃げ出したモンスターを追従するようにして飛んでいく。そして中心にいるモンスターに着弾すると同時に、その矢は周囲のモンスターを巻き込むようにして爆発した。

爆発に飲み込まれたモンスター達はしばらくの間断末魔を上げていたが、すぐに魔石を残し身体を瓦解させる。

「これがこの世界の魔法か…消費した魔力に対して魔法の威力が高い。やはり詠唱が魔法の完成を支えているのか…いや、本人の資質も関係しているのか？どちらにせよ興味深いな…」

モモンガは、魔法がモンスターに命中したことに安堵しているレフィーヤを視界にとらえながら様々な仮説を立てていく。

「オーグアアアアアアアッ！！」

その時、爆発した煙の中から一匹のモンスターが飛び出してくる。

そのモンスターは先ほどの魔法によって体中に傷を負っていたが、頑丈な種だったのかそれとも運が良かったのか致命傷には至っておらず、魔法を放ったレフィーヤのもとへすさまじい勢いで接近し、牙を突き立てようとその顎を開く。

レフィーヤはその姿を見てとつさに杖を構えようとする。しかし迫りくるモンスターにトラウマを触発されたのか、魔法陣は展開することなく霧散してしまう。

「オーッ！」

そして迫り来る痛みへの恐怖から、レフィーヤは体を縮こまらせ臉を閉じる。

しかし、その牙はレフィーヤの体に突き刺さることはなかった。なぜなら、その攻撃はモモンガの右腕によってかばわれたためである。

「この世界で自分がどのようなダメージを感じるのかという実験も兼ねていたのだが：やはりユグドラシルと同じで、低位の攻撃は上位物理無効化によって阻まれるらしいな」

腕に牙が突き刺さっているにもかかわらず、モモンガの声はそれを感じさせないほど

に平静だった。

これには、モモンガが持つ常時発動型特殊技術バツシブスキが関係している。

上位物理無効化、このスキルはダメージ量の少ない武器や低位のモンスターによる攻撃による負傷を完全に無効化するというものである。

一見するとかかなり強いと感じる常時発動型特殊技術バツシブスキだが、ユグドラシル時代ではそもそもこれに該当するモンスターなんて精々レベル60程度のものしかいなかったため、カンストプレイヤーであるモモンガには雀の涙ほどの恩恵しかなかったスキルである。

しかし、いま目の間にいるモンスターは隻眼アブキョウル・ユウブスの屍からの情報によるとレベル20程度、この常時発動型特殊技術バツシブスキの適応内である。

「しかし、このまま嘯ませしておくのも邪魔だな」

モモンガはレフィーヤを傷つけないために一時的に切っていた負ネガティブ・タツチの接触を有効化すると、モンスターの首根っこを掴み、自身の腕から引き剥がす。

引き剥がされたモンスターはしばらくの間苦し気にもがいていたが、徐々に生気を失っていき、10秒もしないうちに溶け落ちるようにして消滅した。

「この程度のダメージ量でも十秒と持たないのか…どうやらこのあたりのモンスターはどれもレベル20程度の強さしか持ち合わせないらしいな」

レフィーヤの話では、ここらの階層で出現するモンスターの攻略レベルはレベル2く

らいがほとんどだと言っていた。つまりこれらの情報を総合して考えると、ユグドラシルでのレベル10がこの世界のレベル1に相当するという計算になる。さらに、この世界の冒険者は約7割がレベル1〜2なのだという。相当のミスをしでかさない限り、モモンガに命の危険はまずあり得ないだろう。

「モモンガさん大丈夫ですか!?今ポーシオンを使います!!」

手のひらに残った魔石を眺めながらモモンガがそのようなことを考えていると、顔を上げたレフィーヤが大慌てで腰に付けたポーシオンを差し出してくる。

「いいいや、大丈夫だ傷はない!気持ちはずれしいが私にはおそらく効果はないからそれは取っておいた方がいい」

十中八九善意で差し出したものなのだろうが、モモンガのようなアンデッドにはポーシオンはむしろダメージになりかねない。それに、効果のない相手に使うよりはレフィーヤが大怪我をした際の予備として持っていた方が効率的だろう。

モモンガはレフィーヤの差し出すポーシオンを腰のバックへと納めさせる。

「…すみません。私、アイズさんだけでなくモモンガさんにまでご迷惑を…」

レフィーヤは、すっかり意気消沈した様子でモモンガに向かい頭を下げる。先ほど下手に励ましたこともあって責任を感じているのだろう。目元には涙がにじんでおり、エルフ特有の耳は今のレフィーヤの感情を伝えるようにしよんぼりと垂れ下がっていた。

…なんだか小型犬を彷彿とさせる。ギルメンに聞いたり動画でたまに流れってくる程度でしか知らないが、その姿には庇護欲が湧いてくる感覚がする。

「いや、この程度であれば迷惑のうちにも入らない。それに、今の経験を踏まえてレフイーヤが何処を改善すればいいか分かればおつりが出るくらいだ。次に活かしてくれればそれでいい」

それに、レフイーヤが敵を打ち洩らさなかつたとしても何処かで上位物理無効化の実験はしたいと考えていた。それを加味するなら今回はプラスでしかないのだ。

「…はい！次は間合いに入りこまれても、冷静に対処できるようにします！」

そんな下種な考えを知る由もないレフイーヤは、顔を上げ決意を新たにする。

騙しているようで心が痛むが、これまでにもモモンガはレフイーヤに対し数々の虚偽ブラフを重ねている。今更1つ2つ増えたところで変わりはしないだろう。

「よし、それでは先に進むとしよう。目的地の安全地帯セーフティゾーンまではそう遠くはないはずだ」



歩を進めていくと、太い柱のような木々が立ち並ぶ森と洞窟を掛け合わせたかのようなものから、草が生い茂る草原のようなものに周囲の景色は変化していく。どうやら、セーフティゾーン安全地帯はすぐそこらしい。

レフィーヤの顔には、分かりやすいくらい喜色が浮き出ている。モモンガもまた、見飽きた景色が変化したことに喜びを隠しきれない。

「あとはこの先の広間を抜けたら18階層、セーフティゾーン安全地帯です！」

「そこまで来たら、私の護衛も終了というわけだ。無事に案内が終わりそうで安心したよ」

骸骨の身になってから肉体の疲労は消滅したが、精神の疲労は人間だったころと同じように残っている。周囲を警戒しながらの探索にはさすがに少し疲れてしまう。

「いや、そもそも周囲をアイボールド・コープス隻眼の屍に探索させていたのだから、敵が来た時に警告してもらえばよかったのでは？」

そんな考えが頭をよぎるが、モモンガは脳内でそれを必死に否定する。

ここまでの道のりで得た物が多い。スキル・レベルについての考察、レフィーヤの信頼、モンスター、そのどれもがあつた状況だったからこそ手に入った情報だ。きつと楽をしていれば手に入らなかつた情報もあるはずだ……多分。

「そうだ！私、セーフティゾーン安全地帯についたらモモンガさんにお礼をしたいんです。ファミリアの

皆さんにも紹介したいですし、18階層に着いた後も私と一緒に行動しませんか？」

モモンガが脳内で葛藤をしていると、レフイーヤが声をかけてくる。

地上に出たいモモンガにとって、この発言は実に魅力的だ。モモンガはこの世界に來たばかりで、迷宮ダンジョンはおろか、地上の地理すらほとんど分かっていない。それらの多くを知っているレフイーヤがついてきてくれるなら、それは素晴らしいことだろう。

「…とても魅力的な提案だが、申し訳ない。それに応じることはできない」

しかし、モモンガはそんなレフイーヤの提案を蹴る。

この世界において冒険者とは、モンスターを討伐しそこから出現ドロップしたもののから生計を立てるものを総称して言う。そして、モンスターは人型であったとしても調教テイム以外の方で人間に味方することはない。

この世界でモンスターと人間が肩を並べるなんてことはあり得ない。たとえ彼女のファミリアに挨拶に行っても、始まるのは殺し合いだろう。当然、そうなったらモモンガも手加減することはできない。

「今、レフイーヤと私が一緒に行動しているのも仕方ないとはいえ君のファミリアにとってはあまりよい行動とはいえない。私に救助されたと言う情報は、可能な限り隠ぺいした方がいいだろう」

「そうですよね…わかりました。でも、すごく感謝しているってことは分かかってほしい

んです！」

「その言葉だけで十分だよ。こちらとしてもいろいろと収穫があった、こちらこそ感謝したいくらいだ」

この世界の情報をここまで収集できたのも、彼女がいたからこそである。彼女がいなければ、モモンガは今も漠然と迷宮ダダダダダダをさまよっていたことだろう。

モモンガがそんな想像に寒気を感じつつ歩みを進めていると、モモンガは異臭を感じ取る。

「これは…血の匂いか。それもまだ乾ききっていない濃い匂いだ」

そしてそれはレフイーヤも同じようで、その異臭に顔を歪めていた。

どうやらこの先の広間には人間の血が大量に流れているらしい。怪我をしているのか、それとも死んでいるのか、どちらにせよろくな状況ではなさそうだ。

モモンガは無意識のうちにゆるんでいた気を引き締めなおすと、匂いが強くなつていく広間へと足を踏み入れる。

「これは…予想以上に酷いな」

そこには、モモンガがまだ人間であつたなら失神してしまうような光景が広がっていた。

広間には、数十を超えるモンスターがひしめき合っており、今なおその数を増加させ

ている。そして、そのモンスターたちはレフイーヤの仲間たちだったであろうピエロのような紋章が背中に刻み込まれた死体を奪い合っていた。

その死体からあふれ出した血液は広間の床に流れ出て、広間を真っ赤に染めている。破片はそこら中にまき散らされており、どれが誰のものであったか検討すらつかない。

「え、あ、なん、で、どうして」

レフイーヤは、目の前の光景に放心して動かなくなってしまう。体は恐怖のあまり小刻みに震えており、失神していないのが奇跡に近い様相だ。アンデッド化により精神の動きが鈍化したモモンガでさえ顔を歪めるほどなのだ。レフイーヤの精神的ショックは計り知れないものだろう。

モンスター達はしばらくの間目の前の死体を一心不乱に貪っていたが、数が多いこともあり足りなくなつたのか新たな獲物であるレフイーヤへと目を向けてくる。

モモンガはそんなモンスター達に対し、歩を進めていく。

いくら仮初の契約だとしても、ここで放心しているレフイーヤを見捨てるつもりは毛頭ない。それに、モモンガは短い間の交流ではあったが、レフイーヤという人間を気に入ってしまったのだ。

レフイーヤはこんな化け物の身であるモモンガに対し会話を続けてくれて、最後にはモモンガと一緒に去ろうと誘いをかけてくれた。

レフィーヤがくれたその言葉は『鈴木悟』という人間が渴望していたものであった。この身が人間の物であったなら、モモンガはレフィーヤの手を喜んで取っていたらう。

しかし、今のモモンガはレフィーヤの手を取るに値しない臆病者の怪物である。外見、性格、その他にもレフィーヤに見せるものはすべて都合のいい虚像でしかない。

だからこそ、モモンガはいつか、本当の自分としてレフィーヤに相對したいと強く思う。

「今ここでレフィーヤを殺させるわけにはいかないんだよ。…化け物は化け物同士で仲良くしようぜ？」

そう言つてモモンガがモンスター達を見据えると、モンスター達はただならぬ氣迫に押されたのかどよめくような唸り声をあげる。

そしてモモンガがモンスターの群れに飛び込もうとしたその瞬間、モモンガは自身の右腕の袖が引かれているのを感じ取る。

見れば、先ほどは狂氣に飲まれたようにして放心していたレフィーヤが、未だ恐怖に顔を歪めながらも杖を持ちモモンガを真っ直ぐに見つめていた。

「わ、私も戦います！ 恐怖にとらわれて何も行動できずに後悔するのは、も、もうたくさんなんです！」

そのフロアに居る全モンスター達はこちらに向かいなだれ込むようにして迫ってくる。轟音を上げ、視界のすべてをモンスターがひしめくその光景はまさしく『絶望』という言葉が相応しいのだろう。

しかし、モモンガにはもうそれを絶望と呼ぶことはできない。そんな怪物になつてしまった。

だが、それでいい。自分はそれらすべてを受け入れ、前に進んでいく。

フライ
浮遊

ウインド・バレット
風の弾丸

モモンガは宙に浮かぶと魔法を推進力とすることで加速、モンスター達に向け言葉通り弾丸のような速度で急接近する。

そしてモンスター達の眼前に一瞬で移動したモモンガは、右腕を素早く構え魔法を紡ぐ。

トリブレットマキシマイズマジック
魔法最強三重化 連鎖する龍雷

その言葉と同時にモモンガの手から放たれた三本の雷電は、先頭のモンスターから連鎖するようにして放射状に伸びて行く。そして雷電が身体を通過したモンスター達は瞬く間に黒い炭となり、魔石すら残さず消滅していく。

「悪いが手加減するつもりは毛頭ない。…行くぞ？ 塵殺だ」

モモンガはそう言って、モンスターに手をかざすと伽藍堂な頭蓋骨に浮かぶ赤眼を不気味に光らせるのだった。

成長するエルフ

魔法最強化 マキシマイスマジック
闇の衝撃 ダークウェイク

モモンガが右腕を振るえば、数十体を超えるモンスターが灰燼に帰す。

魔法三重化 トリプレットマジック
結晶の雨 クリスタルレイン

さらにモモンガが左腕を振るえば、その倍の数が魔石すら残さず消えていく。

新しいモンスターが絶えず産み落とされ、今や広場を埋め尽くさんばかりとなっている異常事態。
イレギュラー

本来であれば冒険者にこの上ない絶望を与えるであろうその場所は、今や逆にモンスター達にとっての絶望の地となっていた。

敵は彼らが今まで会ったことすらないほどのでたらめだった。近づけば死ぬ、離れていても魔法で死ぬ、魔法をなんとか放ったとしても敵を中心とした障壁に阻まれる。

「…そろそろだな。レフイーヤ、行けそうか?」

「はいー行きますー撃ち放て、妖精の火矢。雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払

えー」【ヒュゼレイド・ファラーリカ】

さらに、モモンガの魔法を仲間達を盾にすることで何とかしのいでいたモンスターは

レフィーヤの魔法により盾ごと跡形もなく焼却される。

どれほどの数で襲い掛かろうともそれらを容易く打ち滅ぼす二人にモンスター達はもはや撤退することすらままならない。活路を見出せぬままその数を刻一刻と減らししていくのみである。

しばらくすると、モンスターを生み出すエネルギーが切れたのか、それとも別の目的があるのかは定かでは無いがモンスターが出現する際に響いていた壁のひび割れるような音も聞こえなくなっていた。

「どうやら、モンスターの追加が止まったみたいだな」

「あとはここにいるモンスター達を倒すだけです！」

その事実レフィーヤの目にさらなる闘志が宿る。

そんなレフィーヤの姿に気圧されたのか先頭に立っていた狼のようなモンスターが一步後ずさり、その恐怖が伝染するようにしてモンスター達の顔に明確な“怯え”が浮かび上がってくる。その中には口元をロキファミアの血で汚した者たちの姿もあつた。

エクス・テンド・マジック
魔法持続時間延長化 岩壁作成

「逃がさんよ、自分は散々命を奪ってにおいて今更殺されたくないなんて。そんな道理は通らないだろう…なあ？」

しかし、モモンガはその退路を塞ぐようにして石造りの城壁を作成する。

モモンガはこの場にいるモンスター達の一切を逃がすつもりはなかった。このモンスターをけしかけた黒幕の目的は何であれ、ここで一番されたくないことはこちらの情報を持つていかれることである。一匹でも逃がせばいくら情報操作のためにあえて低位階の魔法だけを使用しているとはいえ、決して少なくない情報が相手に伝わってしまうだろう。

探知系のスキルや隻眼アイボールド・コープスの屍が感知していない以上直接この状況を見ている可能性は少ない。だとすれば情報を広めない最適の方法はこのモンスター達を一掃することだ。

「誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ——

レフィーヤが魔法の詠唱を開始する。詠唱とともに立ち上る光は先程とは比べ物にならないほど大きく、紡がれる矢は暴力的なまでの輝きで広場全体を照らしていく。

——帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢。雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え!!」

そして詠唱が終了するとともにその輝きは最高潮に達する。その一撃はおそらくユグドラシルの50レベルが放つ魔法と遜色ないほどである。

レフィーヤは魔法の詠唱が終了するとともに一呼吸置く。そして覚悟を決めたよう

にして目を見開くと、撃鉄を下すようにして杖を振り下ろす。

「——ヒュゼレイドオ・フアラールカアアアアアアアア!!」

その号令とともに、迷宮を照らす幾万もの炎の矢がモンスター達に疾走する。

凄まじい轟音は響き渡るモンスター達の断末魔すらかき消し、爆風は天井に生えていく結晶を砕く。

レフィーヤのありつただけの魔力を総動員した魔法は、広場にいたモンスターの大群を一挙に打倒したのであった。



「新たに生まれるモンスターは見当たらない……どうやら、我々は難を逃れたようだな」
アイボール・コープス
隻眼の屍による索敵やいくつかの探知系魔法を発動させて周囲の安全を確認したモモンガはガウンに付いた埃を払う。

手加減はしていたが、この戦いはモモンガが初めてユグドラシルの頃のように知略をめぐらせて戦った戦闘であった。体には全くないが精神的に感じるほどよい疲労感

モモンガの顔をほころばせた：表情は変わらないので心の中ではあるが。

レフィーヤを見れば、彼女は魔法により荒れた広場の一角に何かを埋め手を合わせている。いくつかの剣や杖などの武器が刺さっているところを見るにおそらく仲間たちの墓標なのだろう。

「言ってくれたら手伝いくらいできたぞ？」

「いえ、これは自分がやらなきゃいけない気がしたので。家族の最期くらいは私がちゃんと看取ってあげないと」

「…そういうものなのか」

モモンガの元居た場所では、看取りや埋葬の文化はいくつかの富裕層だけの特権になっていた。汚染された空気に耐え切れなくて病気で死んだり、仕事のし過ぎで過労死したり、多くの貧民にとって“死”というものは悼む必要がないくらいありふれたものだったからだ。

：もしかしたら、自分の母親も最期を看取ってほしかったのだろうか。そんな疑問がモモンガの心の中に生まれる。

しかしその問いに答える者はいない。いや、そもそもその問いに答えなどありはしないのだ。ありふれたフィクションのように心残りが幽霊アンデットになるなんてことはなく、いつだって死者に意味を求めるのは残された生者なのだから。

「そろそろ行こう、長居しているとまたモンスターが現れるかもしれない」
「はい、わかりました」

モモンガとレフィーヤは墓標に向けて最後にもう一度手を合わせると、上の階層へと続く道へと歩みを進めていく。

「地図を見るに、この道をまっすぐに進めば安全地帯セーフティゾーンに着くだろう。近くには冒険者がいるだろうから、私たちはここでお別れだな」

「それはそうなんですけど…あの、やっぱり一緒に行きませんか?」

「不安なのは分かるが、私を連れて行っても起こるのは争いだけだぞ。レフィーヤも初めて私を見たときには殺そうとしてきただろう?」

その言葉にレフィーヤは表情を暗くし、顔を伏せてしまう。

少しつき放つような言動になってしまったが、レフィーヤは変に押しが強いところがあるのでこれくらい言わないと諦めないだろう。

モモンガの返事を受け未練そうに後ろを何度か振り返りながら道を進んでいくレフィーヤを見送り、先ほどの広場ほどまで歩いてきたモモンガはふと考える。

…そういうえば、ここまで何処にも居なかつたが周囲のモンスターを殺すように命令を出した死デスナイトの戦士はどこに行行ってしまったのだろう。

定期的な報告をもらっていた隻眼アイボルク・コープスの屍とは違い偵察と外敵の排除のために呼び出し

てみたはいいものの一度も報告がなかったので若干忘れかけていたのだが、一体何処で道草を食っているのだろうか。この道はいくつかのルートの合流地点となっているのでもうとつくに合流してもおかしくないのだが。

「ひよつとしてボーコットでも起こされたか？ やっぱり給料もなしに命令だけ出しても従ってくれないよなあ…アンデッド相手の給料ってどう払えばいいんだろう。宝石とか喜ぶかな？」

しなくてもいい不安に数秒間悩むモモンガであったが、とりあえずは己の身を守ってもらうためアイテムボックスから宝石を取り出しながらアイホール・コープス隻眼の屍にしていたように話のようなものを送信する。

しかしその瞬間、モモンガは一つの違和感に気づく。少し前まで感じていたデスナイトとの接続が途絶えている。

全ての召喚物の接続が途絶えた可能性を考慮しアイホール・コープス隻眼の屍とパスを繋ぐが、数秒と経たずに応答がある。

「アイホール・コープス隻眼の屍。異常事態だ、索敵範囲を最大限に引き上げる。報酬は…え、要らない？ 御身に仕えられるだけで充分？ あ、うん、そうなのか」

社畜も真つ青なアイホール・コープス隻眼の屍の献身具合に若干引いてしまうが、仕事ぶりには変えられないとモモンガは喉まで出かかった否定の言葉をなんとか飲み込む。

アイボール・コープス
隻眼の屍は白濁した無数の目を見開くと先ほどとは比べ物にならないほどの情報をモモンガに送る。周囲のモンスタースターの動向、死体の数、鉱石やその他アイテムなどについてや地図には書いてなかったダンジョンの隠し通路まで、普通の人間の脳であれば発狂するであろう膨大な情報の中からアンデッドであるモモンガは必要な情報を取捨選択していく。

その中からモモンガはとある重大な事実を把握する。それはデスナイトは仕事をボイコットしたのではなく、既に倒されていたということである。

死因は細いレイピアのような刃物で切り刻まれた後、魔法を打ち込まれたことによる焼死である。攻撃方法から見るにダンジョン内にいる冒険者によるものだったのだろう。

デスナイトはモモンガ自身が作成したアンデッドなので本来のものよりも高いレベルの強さとなっていた。さらに彼にはスキルとして倒されるほどのダメージを与えられても1度だけその攻撃を耐えるというものがある。加えて人を殺すなど命令を出していた以上彼は接敵を避けていたはずだ。

にもかかわらずデスナイトはこちらに接敵したというメッセージを残す余裕もなく討伐されている。ということは相手は間違はなくデスナイトと同等、もしくはそれ以上の者であると考えられる。そのようなことができる隻眼アイボール・コープスの屍の索敵範囲内にいる人

物、および団体にモモンガは心当たりがあった。

「デスナイトを殺したのは、きつとロキファミアなんだらうな」

口に出した己自身の言葉によりモモンガの心にわずかばかりの寂寥感が襲う。

レフィーヤにあれだけ論しておいて、モモンガも彼らと平和的に交流ができるのではないかと心のどこかでは期待していたらしい。

しかし理解はしてははずだ。この世界の人々にとつてモンスターは自分たちに襲い掛かり命を奪う敵対者であると同時にオラリオから算出される利益の基盤を築いている資源でもある。そんな対象に今更意志があつたと分かつたところで、和解という選択肢を取ることができる人物はほとんどいないだろう。

「……いやいや、これ以上考えても仕方ないことだろこれは。それよりもこれからどうするか考えないと。とりあえずは地上に出なきゃダメだよな。この姿もなんとかしなきゃいけないし、今持つてるアイテムの整理もしなきゃな」

モモンガは心に淀む暗い感情をため息とともに吐き出し、これからのことについて思考をめぐらす。

その瞬間、ダンジョン全体がけたたましい地響きをかき鳴らしながら胎動する。壁は振動によりいたるところにひびが入り、天井からは水晶のかけらが落ちガラスのような炸裂音とともに碎け散る。

さらに隻眼アイボール・コープスの屍から届いた情報にモモンガは驚愕する。

それは現在ロキファミアが駐屯地として利用しており、レフィーヤを送り届けた18階層に多数のモンスターの反応が出たというものであった。

その上、モンスターの内一匹はユグドラシル産と言われても違和感がないほどに魔力量が突出していた。

そもそもレフィーヤの話ではこの階層にはモンスターは出現しないはずである。それに出現している数も尋常ではない。この数に加えユグドラシル産に匹敵するモンスターとあればいくらオラリオ屈指の強さを持つロキファミアも少なくない犠牲を出すだろう。

かといって助けに入ることは、自らの存在をロキファミアひいてはオラリオに晒し命を脅かされることになりかねない。

「…だからって見殺しにできるほど、人間をやめられるわけないだろ」

モモンガは少々の思案の後、自らの杖を掲げ、その先に魔力を込める。

転移ゲート門

そしてレフィーヤの魔力をたどることである程度の座標を割り出すと、モモンガはおそらくユグドラシルで最も使ったであろう転移呪文を唱えその門をくぐるのであった。

「全軍、僕達のテントを中心として陣形を組め！ガレス達はリヴァラの街の住人と協力して避難が遅れた人々の保護！他の団員は進行するモンスターの討伐を優先してくれ！」

「了解じゃ、フィン！」

「俺たちはモンスター共の討伐だ！行くぞアイズ！バカゾネスども！」

「分かりましたベートさん」

「誰がバカゾネスだ！」

「私達も詠唱に入る！魔法の使える者は私について来い！」

「了解！」

『迷宮の楽園』とも呼ばれる18階層、そこは今魔物と冒険者が渦巻く真の戦場と化していた。

魔物達は現在大きく分けて3箇所に分かれている入り口から途方もない数が入り込んでいる。それはまるでモンスターで構成された川のように18階層へとなだれこみ冒険者へと襲いかかってくる。

18階層が中層ということもあってかりヴァラの街にはレベル2のもしくは3の冒

「険者が数十人単位で在席しており今のところ死者の報告はない。」

「しかしながらモンスターの数は街に住む冒険者の数をはるかに超えている。いくらロキファミアリアが援護を行っているとはいえ、このままでは死者も現れることだろう。」

「もー！今日のダンジョン変なこと起こりすぎ！レフィーヤのことといいモンスターといい今日は厄日だ！」

「口じゃなくて手を動かせや！このままじゃ防衛線突破されるぞ！」

「わかつてるつてば！でも数が多すぎるんだよー！」

「叫び声を上げながらティオナは彼女の武器である大双刃ウルガを振り回し進行するモンスターを薙ぎ払うが、一向にその数が減少する気配は無い。」

「本来であれば、ロキファミアリアの上位幹部にとつて中層のモンスターは脅威と感じるほどの強さは持ち合わせていない。しかし今彼らを苦しめているのは、その数であった。」

「モンスターの出現が止まらない…それにリヴェリアの魔法も出現する範囲が3か所に分かれてるから追いついてない」

「それでも私達にできるのは目の前のモンスターを倒すことだけよ。倒し続ければいつかはこの勢いも——」

ティオナの言葉を遮るようにして再び18階層に轟音が響き渡る。

しかし、その轟音の正体は先ほどまでの地響きとは全く異なるものであった。「…なんだ、ありやア」

ベートの口から発声を空転させたかのような掠れた声が漏れる。

彼の視線の先には、モンスターが出現していた道のうち正面の道を打ち破り現れたあまりにも巨大なモンスターの姿があつた。

その体軀は迷宮の楽園に自生している樹木を遥かに超える大きさをしており、爬虫類を想起させる身体は硬い岩のような鱗に覆われそこから無数の結晶のような棘が生えていた。

彼は二足の足を動かしながら足元を走るモンスター達を意にも介さないとばかりに踏み潰しつつこちらへと向かってくる。鈍重な動きではあるが、もう20分もしないうちに自分達の立つているこの位置まで進行してくるだろう。

「いやいや、いやいやいや、あんなの反則でしょ！深層でもあんなヤバそうなモンスター居なかつたって！なんだってこんな浅い層に来るのさー！」

「まだ避難誘導も満足にできてないのよ!?レフィーヤだつてまだ見つかつてないのに！」

「でも、あれが到着したら確実に私たちの陣形が崩れる…そしたら——

その時、ロキファミリアの防衛線から抜け出してきたのか虎のような風貌をしたその

モンスターがアイズの前に躍り出る。

本来であればアイズの実力はこのモンスターを容易く排除できるほどに高い。しかし今、アイズは長時間の戦闘と魔法の乱発により体力と精神力を大きく消耗させていた。

そしてその消耗が、アイズに致命的な隙をもたらす。

「——あッ」

足に力が入らない。

そう感じると同時にアイズの左膝は地面に着き、そのまま体全体は後方へと倒れてしまふ。

今まで無視していた疲労感がアイズの体を地面へと強く縫い付けていく。気づけばアイズは体全体にのしかかる重量感に一步たりとも動けなくなってしまうていた。

もちろん、そんな絶好のチャンス逃がすほどダンジョンのモンスターは生易しくない。

虎型のモンスターはアイズに向かい急速に接近するとその勢いを残したまま後ろ足で跳躍、顎を開き眼前の標的の首を喰らわんと肉薄する。

「アイズッ!!」

「クソッ！動けねエ!!」

テイオネ達はすぐさまアイズの助けに入ろうとするが、防衛線の維持に戦力を総動員させてやっと現状を保っている今の状況で彼らが動けばこの防衛線は崩壊する。そうなるってしまったてはアイズ一人ではなくこの場にいる全員の命を失う事態になる。

アイズは自らの死を幻視し、せめてもの抵抗として右腕で顔をかばい固く目を閉じる。

しかし、しばらくの間そうしていてもアイズの想像していた己の腕を牙が貫くような痛みはやってこない。

疑問に思い目を開けると、目の前にいた虎型のモンスターは彼女から少し離れた岩の上に倒れていた。よく見てみるとそのモンスターの腹部には光り輝く魔力で構成された矢が突き刺さっていた。魔石を直接貫かれたのか、アイズが視線を向けている間にそのモンスターは灰と化してしまふ。

いったいどこから。アイズは魔法を飛んできたであろう方角に視線を向ける。

現在、ロキファミリアに所属している魔導士たちは全員後方からのモンスターの討伐に奔走しており援護に入る余裕はない。それに他のファミリア所属の冒険者は統率の乱れを避けるためテント周囲の荷物の整理などの戦闘には関わらない支援に限定させていたはずだ。

加えてアイズにはこの魔法に見覚えがありすぎた。なぜならばこの魔法は、まさしく

アイズたちが探していた少女のものであったからだ。

視線を向けた先の小高い丘の頂上にはやはりとすべきか、彼女たちが想像していた通りの少女の姿があった。

服は長い間ダンジョンにいたことが一目でわかるほどにボロボロであったが、ポーションを使ったのか体には傷一つ付いていない。そんな風貌をしたエルフの少女は特徴的な山吹色の長髪をなびかせながらこちらを見下ろしていた。

そして、アイズと目が合うと真剣な表情をわずかに緩めこちらに向かい柔らかく微笑みかける。

「遅れてしまつてごめんなさい。お怪我はありませんか？アイズさん」

「レフィーヤ!!」

少女の姿を目にした3人の少女は満面の喜色を湛える。

レフィーヤは丘を駆けるようにして降りると前線を固める集団の中心へと合流する。

「ちよつとレフィーヤ! すつごい心配してたんだからね! 今までどこにいたのさ!」

「すみませんティオナさん。いろいろと説明はしたいんですけど、色々ありすぎて長くなりそうなのでその話はこの戦いを終わらせてからにしましょう」

「オツケー! じゃあレフィーヤも戻ってきたし、私は何も考えず目の前のモンスターを倒すぞー! おりゃあー!!」

心の中によどんでいたレフイーヤへの心配が消えたことにより、ティオナの剣撃の鋭さが数段階底上げされる。

それにより現状維持に留めていた前線には少しづつ余裕が生まれていく。たった数人の心境の変化ではあったが、レベル5クラスの動きの変化はそれだけ戦況に影響を及ぼすのだ。

「私たちも後に続くわよ！ティオナが作ってくれた活路を閉ざすわけにはいかない！」
「わーってるよ！」

ティオネとベートはそんなティオナの姿に触発されたのか自らの武器や拳を構え、勇み足に前方に蔓延るモンスター軍団へと飛び込んでいく。

「レフイーヤは、リヴェリアの後方部隊に合流して。あそこならここより絶対に安全」
残ったアイズはレフイーヤに向けそう言っ後方のテントの方角を指さす。

「私が、絶対後ろに通さない。守るから」
「いいえ、守られるだけじゃ嫌なんです」

そんなアイズの言葉を遮るようにして、レフイーヤが口を開く。

「私は今まで何度もアイズさんや、いろいろな人たちに迷惑をかけてきました。でもそれを後悔したまま怯えて後ろに下がるなんて私はもうしたくない。わがままかもしれませんが、私はアイズさんたちに守られるだけじゃなくて、今度は私からも皆さんを支

えられるようになりたいんです！」

レフィーヤの意志のこもった主張にアイズは驚愕を露わにする。

以前までレフィーヤであれば咄嗟の状況にあまり慣れておらず、自身やりヴェリアの後ろについて回る様子がよく見られるどころかという気弱な少女といった雰囲気醸し出していた。

しかし、今となつてはその瞳に確固とした覚悟を宿しており、醸し出す覇気にはレベル5であるはずのアイズですら気圧されていた。

いったい彼女に何が起きたのだろう。

それを知りたい気持ちはやまやまだが、レフィーヤが先ほど言った通り今はそんな余裕はない。

「この状況を変えられる策が1つあります。今から私がここで詠唱を始めます。この距離だと成功する確率は100パーセントとは言えませんが、相手の陣形に大きな損害を与えられると思います。その間、こちらに向かつてくるモンスターを何体か受け持つてほしいんです。お願い、できますか？」

しかし、そんな中でもアイズは1つだけ確信を持つて言えることがある。

「…わかった。そっちは任せた」

「はいー」

それは、レフイーヤは失敗を踏み越え今、大きく羽ばたこうとしているということだ。

備えあれば憂いなし

「解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり——

防衛線の前線に立ち、レフイーヤは詠唱を開始する。

彼女が詠唱を開始するとそれに呼応するようにして周囲の魔力は彼女へと収束し、それはしだいに一本の矢の形を取る。

しかし、それは多くの魔導士の目から見れば自殺行為そのものであった。

魔力を使用した魔法の行使。それはいくら魔法の扱いに長けているエルフであったとしても並々ならぬ集中力を必要とするものだ。

だからこそほとんどの魔導士は魔法の行使を行う際にはその場から動けず、固定砲台のような役割をパーティの中で果たしている。

しかし、レフイーヤが今行なっていることはそれとは全くの逆である。もしこの場にロキファミアのママとも呼ばれているとあるハイエルフがいたとしたら、すぐさま後方へと引き戻され、数時間の叱責をさされていただろう。

そんなレフイーヤに対し、疲弊した防衛線を突破した数匹のモンスターが迫る。

彼らは他の魔導士の例に漏れずその場で停止して詠唱をしている人間を目にすると、
レフイーヤ

顔を笑みで歪め彼女へと襲いかかる。

今までのレフィーヤであれば、この段階で目の前のモンスターに対しての恐怖により詠唱を止めその場にうずくまっていただろう。

——狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢！

しかし、彼女の口からは呪文が途切れることなく紡がれる。

その瞳にはモンスターへと恐怖はかけらすら存在せず、モンスターを真っ直ぐに見つめるその瞳にモンスター達は思わず立ち止まる。

「……ふっ！」

そして、そのスキを冒険者は見逃さない。

アイズは足を止めたモンスター達に肉薄し、その首を貫くことで彼らを消滅させる。

「レフィーヤ、モンスター達はあそこに集まっている。魔法をお願い！」

「わかりました、『アルクスレイ』！」

アイズの指さす方向にレフィーヤは杖の先端を向け、魔力の凝縮された矢をモンスター達に向けて打ち出す。

モンスター達は自分たちに向け高速で飛翔する物体を避けるために体を動かそうとするが、密集した状態の彼らでは互いが互いの動きを阻害し満足に移動することすらかなわない。

そうして矢は密集した彼らを一度に貫き、後方にいる他のモンスターを巻き添えにしながら爆発しその場に魔石を残し消滅する。

「周囲のモンスターはかなり少なくなりましたね。今から長文の魔法を詠唱するのでアイズさんは引き続き私の周囲のサポートをお願いします」

「わかった、今度は一匹もそっちに通さないから」

「そう言ってくれるのは嬉しいですけど、無理はしないでくださいね」

レフィーヤはアイズを言葉に対してあいまいに微笑み、新たな敵を迎撃しに走り出した背中を見つめる。

彼女の心の中には今、一つの疑問が渦巻いていた。

それは、以前までの自分であれば目を輝かせながら狂喜乱舞していたであろうアイズの言葉に自らの心があまり揺れ動かなくなっていることだ。

少し離れていた間に彼女に対する信頼が下がってしまったのだろうか。いや、そんなことはない。今でもアイズという人物はレフィーヤの中でひと際尊敬する人物であると確信を持って言える。

ではこの胸の中に残る違和感はいったいなんなのか。

レフィーヤは長文詠唱に入るため懐に括り付けたポーチから一本のmanaポーションを取り出し、それを口に含みながら思考をめぐらせる。

そしてレフィーヤは一つの結論にたどり着く。自身が今まで彼女のことを仲間としてではなく自らの憧憬の対象としてでしか認識していなかったということである。

なまじ才能にあふれアイズやリヴェリアなどの圧倒的に格上の仲間たちと冒険していたことも起因しているのだろう。いつしかレフィーヤにとつてダンジョンに潜るという行為は自らの道を切り開くものではなく、彼らが切り開いた道を後ろからついでだけのものとなつていた。

それはレフィーヤが共に冒険をする者たちのことを仲間としてではなく、劇場にいる観客のような視点から見ていたことに他ならない。

「……ッ！」

レフィーヤは緩んでいた気持ちを引き締めるように自らの頬を張る。

思い至る己の浅薄さに心底腹が立つが、ここで自己嫌悪に浸るのは以前までの自分と変わらない。

『すでに起きてしまったことは、どんな方法を使つても覆すことはできない。自分を責めたところで残るのは罪悪感か後悔くらいなものだ。重要なのは、次にその失敗を繰り返さないために失敗から何を学ぶかだ』

モモンガはおそらくレフィーヤのこの歪みを少ない交流の中から見抜いていたのだろう。だからこそ、レフィーヤがその事実気づいたときのためにあんな助言をしてく

れていたのだ。

ロキファミアリアの上級幹部たちと比べてもあまりに大きすぎるその姿を理解していたつもりであつたが、その想定をやすやすと乗り越えるその底知れなさに畏怖とともに強い敬意を抱く。

しかしその敬意は憧れとしてだけではない。いつか並び立つ壁としてである。

「憧れるだけじゃ足りない！私は、私の道を切り開く！」

そしてレフィーヤはその決意の咆哮とともに再び杖を掲げ、魔法の詠唱を始める。

「ウイーシエの名のもとに願う。森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ——

彼女が詠唱を始めると、その光に吸い寄せられるようにしてモンスターが集まってくる。

「レフィーヤのところには、行かせない」

しかし、それを阻むようしてアイズは立ち塞がる。

【目覚めよ】
テンペスト

彼女は剣を胸の前に掲げると詠唱と共に自らの剣に風を纏わせ、突然の新手に一瞬動きの止まった彼らに切り掛かる。18層に存在するモンスター達にとつては目視すら叶わないレベル5による神速の剣は、彼らの存在を知覚する前に消し去っていく。

防衛線付近に存在していたすべてのモンスターを魔石へと変えたアイズは、乱れた呼吸を一呼吸置くことで整えるとレフィーヤを一瞥する。

——繋ぐ絆、楽宴（らくえん）の契り。円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪。どうか——力を貸し与えてほしい！

今までの彼女とは明らかに違うそのまっすぐとした立ち姿、そして決意に満ちたその瞳にアイズは後方にて魔法の詠唱を行っている彼女の師リヴェリアの姿を幻視する。

短期間での過剰な経験値取得による急成長、それ自体は珍しいことではないが前例はある。かく言うアイズ自身も毎日のようにダンジョンに潜り続けることによりレベル5まで駆け上がった。きた。

しかし、その成長はステータス面での成長がほとんどである。さらに言うならレフィーヤがダンジョンに取り残されていたのはたった半日。にもかかわらず彼女はレベルとちぐはぐに感じるほどの雰囲気を感じている。

最近頭打ちとなっている自らの成長に役立つことがあるかもしれない。後でティオネと一緒に何があつたのか聞こう。

アイズは後でレフィーヤに尋問を行うことを決心し、防衛線に再び集まってきたモンスターの迎撃に駆け出す。

そしてその瞬間、彼女が詠唱を終了したことにより足元から淡く光る魔法陣が出現す

る。

【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風（うず）を巻け——

そしてレフィーヤは更なる詠唱を開始する。

先ほどの詠唱は召喚魔法サモン・バーストであり、その効果は同族であるエルフの魔法に限り詠唱とその効果を完全把握することによりその魔法を使用できるといふオラリオを探しても二人として居ない彼女の代名詞ともいえる魔法である。

彼女自身はこの魔法を、今まで発現したにもかかわらずあまり使うことをしなかった。

他者の魔法を模倣する。そんな方法を取ることではしか役に立つことすらできない自らの無力を実感し続けていた。それに自分がこの魔法を使ったことでもし大きな失敗をしたら、魔法を教えてくれた師匠であるリヴェリアに恥をかかせてしまうかもしれない。

今でもその気持ちはあまり変わらない。リヴェリアの詠唱を復唱するたびに自身の胸中に言いようもない恐怖が渦巻くのは事実だ。

——閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け三度の厳冬——我が名はアールヴ——
しかし、レフィーヤはその恐怖を押しえつけ詠唱を完成させる。

足元の魔法陣は詠唱を終えると同時に光り輝き、漏れ出した魔力の影響が彼女の足元

には小さな氷の結晶が生み出されていく。

そして彼女は輝きの収束点である杖の先端を正面へと向け、限界まで引き絞った矢を放つようにしてまつすぐにその撃鉄を振り下ろす。

「——ウイン・フィンブルヴェトル!!」

瞬間、杖へと収束していた膨大な魔力は空気すらも凍てつかせる死の風となつて正面のモンスター達へと吹き抜ける。

冒険者たちに濁流の様に襲い掛かるモンスター達を一瞬のうちに物言わぬ彫像へと変えていくその風は地を這うようにして領域の奥へ奥へと吹き進んでいく。そして最後の余力を放出するがごとく3箇所通路を塞ぐほどの大氷壁を生み出した。

「モンスターの出てくる道を塞いだ! すごい、すごいよレフィーヤー!」

「ぼさつとすんな! チャンスは今しかねえ! 氷が解ける前にあいつらぶつ潰すぞ!」

「思うように動けなくてムカついてたし: テメエら全員バラバラのミンチにしてやらアアアアア!!」

テイオネ達の雄たけびを筆頭に前線で防衛をしていた冒険者たちは動きの止まったモンスター達に一齐に切りかかる。そうして戦線は一気に押し上げられ、先ほどまで数を数えることがバカバカしくなるほどに存在したモンスターの大群は今や目視で確認できるほどにその数を減らしている。

「今のは…私の魔法か？」

「しかし当人である君はここにいます。となればあの魔法を使ったのはおそらくレフィーヤだね」

「ああ、それは私にも分かる。無事なようだと安心した…だが、あれはいつたいなんの冗談だ？ あんな緻密な魔力操作は私ですら難しい」

「僕たちと離れている間に何かがあつたことは確かだろうね。詳しく聞きたいところだけど、その前に状況の解決に専念しよう。ここで決着をつける、手の空いている者は避難誘導をしているガレスと合流して残ったモンスター達の討伐を」

「了解！了解！」

フィンとは近くにいた団員たちを引き連れ、未だ戦闘音の鳴りやまない前線へと進行を開始する。

暗雲立ち込める戦況が瞬く間に改善されたことにより、ロキファミリアの団員たちが今まさにその勢いを取り戻さんとした、その時――

地響きが響き渡る。

フィン、リヴェリア、ガレス、アイズ、ベート、ティオネ、ティオナ、そしてこの場にいるすべての冒険者たちが動きを止め、地響きの方角を見やった。

明らかに領域全体の空気が一変している。

領域全体に響き渡っていた喧騒はぴたりと止まり、静寂がこの場を支配する。

そして、一瞬の静寂を打ち砕いたのは地響きを引き起こした主——18階層の天井に触れんばかりの巨軀を持つモンスターが足に張り付いた氷塊を破壊した音であった。

彼は足元の氷塊を足蹴にするようにしてことごとくを破壊する。そして塔のごとく巨大な尻尾を鞭のようにしならせ、そのまま正面のゴミを払うようにモンスター達の氷像を破壊する。

衝撃はとともに地面はひび割れ、巻き込まれた氷像は地面の隙間へと姿を消していく。

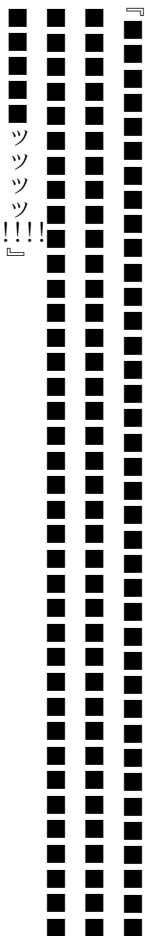
人間だけでなく、モンスターも区別なく殺戮する人知を超えた文字通りの『怪物』。オラリオ最大勢力の一角であるロキファミリアですら遭遇したことのない異常事態イレギュラーがそこには立っていた。

千を超えるモンスターの大群にすら整然たる態度を崩さなかったフィンの頬に一筋の汗が伝う。

右の親指に巻いた包帯からは赤い雫が染みつき、地面へと零れ落ちていた。

『』

怪物はため息を吐くような唸り声を上げ、真正面に棒立ちとなつて立っている冒険者たちを紅く光り輝く両眼でとらえる。そして、小さく身じろぎをすると。



一瞬の静寂を塗りつぶす、超弩級の咆哮を放った。

領域すべてを吹き飛ばす息吹にも匹敵する音の爆発、怪物の周りにクレーターを形成するほどの音塊が響き渡ったその直後、その場にいた冒険者のほとんどが意識を手放し地面へと沈む。

レベル2の冒険者は耳から血を流し、レベル3は血を流すことは無いにせよ時折痙攣を繰り返しながらも目覚める様子はない。

ではそれ以上の冒険者には効果がなかったのか。答えは否、断じて否である。

彼らはその場に縫い付けられてしまったかのように動けない。体が石化してしまっただかのように、その瞳すらも動かさなかったのだ。

圧倒的な格上、そんな言葉がちっぽけに感じるほどの存在。

それをいおうがなしに肌で感じ、フィンは歯噛みする。

己は自分でも気づかないうちに慢心していたのだ。ここはダンジョンの中腹、既に過ぎ去った死線デッドライン。そんな場所で自らに対処できない異常事態イレギュラーが起こることはない。

る。

彼女は怪物へと疾走しながら懐から一つの袋を取り出す。その袋の正面には『備えあればうれしいな』というなんとも気の抜ける文言が印字されていた。

これは、モモンガがレフィーヤと別れる際に渡してくれた拳一つ分ほどの小袋である。

『この中には私が便利だと思ったアイテムがいくつか入っている。使いどころを選ぶが、うまく使えば戦況を変えることもできるかもしれないぞ』

『そんな便利なものを……ありがとうございます！』

『礼には及ばないさ、私にとってはゴミアイテム、無用の長物だからな!!』

『?』

彼は使いどころを選ぶと言っていた。

あの時は言葉を濁していたのだろうが、今なら理解できる。彼の言う使いどころとは今なのだ。

レフィーヤは小袋に手を入れ、その中を探る。

そして怪物は自らに迫る少女を見つめると、その表情を歪め爪を振るう。

爪の薙ぎ払いにより大気はすべてを切り裂く風の刃となり、レフィーヤへと襲い掛かる。

しかし、レフィーヤが小袋から取り出した布切れを振った瞬間、目の前の少女を殺戮せんと迫っていた刃は最初からそこに存在しなかったかのように消失した。

『■■■■■！』

怪物はその光景に驚愕をあらわとしていたが、次の攻撃として尻尾を振り下ろす。

「…レフィーヤッ!!」

圧倒的な強さを持つ龍種によってファミリアの大切な仲間が殺されようとしている。

自らのトラウマを限界まで刺激するその光景に身体の硬直から何とか抜け出したアイズから悲鳴のような声上がる。

しかし、レフィーヤの表情は絶望に歪むことはない。

彼女が再び布切れを迫る尻尾へと振ればその照準は横にずれ、衝撃はレフィーヤを避けるように霧散していく。

この布切れの名前は『ひらりんマント』、レア装備ガチャの中では中当たり分類される回数性のアイテムであり、使用することで魔法のこもっていない60レベル以下の攻撃を無効化し、装備すればフィールド効果を打ち消す効果を持っているのである。

怪物は目の前の光景を信じられないのか躍起となり攻撃を繰り返す。しかし、レフィーヤはそのことごとくをその外套を振るうことにより右へ左へと受け流す。

「…何が起きていやがる、あの攻撃はあの猪野郎でも食らえば致命傷だって分かる。だ

がそれをあのアイズの腰巾着野郎が防いでやがる。あの布切れに細工があんのか…?」
「言ってる場合!?早くレフィーヤの援護に行かないとヤバいつて!」

「落ち着きなさいバカティオナ! あんな攻撃無策で食らったらミンチになるじやすまな
いのよ!」

「でも…ここでももしなかつたらレフィーヤが死んじゃう!!」

恐慌状態から徐々に立ち直っていくロキファミリアの団員たちは目の前の光景に呆然としながらも渦中の中にいるレフィーヤを助けるために各々の武器を持ち直す。

体も、心も依然として死を幻視するほどの恐怖に委縮している。しかし、自分たちよりレベルの下回っている少女が戦っているのにも関わらず棒のように立っていることは彼らの残されたロキファミリアのプライドが許さなかつた。

だが、怪物が彼女に攻撃を加えるたびに発される衝撃波はレフィーヤ以外の人間が戦場に入ることすら許さない。

衝撃波により吹き飛ばされた冒険者はダンジョンの床や天井に叩きつけられ口から血を噴き出す。

そんな冒険者たちの姿を目撃した怪物はニヤリと表情を歪め、彼らの姿をあざけ笑う。

瞬間、彼の顔面に向けて雨のような炎の矢が放たれる。

『■■■■■■■■■■ー!!』

怪物は魔法の飛んできた方向に視線を移し、今度はその表情を怒りの籠ったものへと変える。

レフィーヤはそんな怪物の表情をまっすぐに見つめ、小瓶を咥えた口元に笑みを浮かべる。

「今、レフィーヤの詠唱する声が聞こえたかい？」

「いや、全く聞こえなかった。だがあれは間違いなくレフィーヤのヒュゼレイド・フアラリーカだ」

「並々ならぬ修練によりついに無詠唱で魔法が行使できるようになった。なんて可能性は？」

「冗談を言うな。そんなことができるなら私は並行詠唱を体得しようとは考えなかったさ。おそらく、咥えている小瓶に入っていたであろう魔法薬による効果だろうな……だが、そんな魔法薬が存在するなんてことは噂ですら聞いたこともないぞ」

自分たちと一回り、二回りも年若いレフィーヤの援護に回ることでできないフィンとリヴェリアの二人はそのふがいなさに拳を握り締めながらも少女の奮闘を眺めている。

レフィーヤの飲んでいた魔法薬はこれまた袋に入っていたアイテムの一つであり、そ

の効果は飲んだ後に放つ超位魔法以外の魔法発動までの時間を大幅に短縮し、その魔法の威力を向上させるといふものである。

一見すれば魔法詠唱者であるモモンガにとっては大当たりの部類に思えるかもしれないが、ユグドラシルプレイヤーの中でもカンスト勢の一員であるモモンガにとってはこの小瓶を飲んで攻撃をするよりも魔法を三重にした方が総合的なダメージ総量が高いのである。

しかし、魔法の発動に詠唱を必要とするこの世界の住人にとってその効果はあまりに大きい。

強化された魔法攻撃を真正面から食らったことにより、怪物はその巨体を苦し気に震わせる。

『■■■■■■■■！』

それでも怪物は攻撃の手を緩めない。彼は目の前の少女に向けお返しとばかりに再び風の刃を差し向ける。

その攻撃は先ほどの様に彼女の振るう外套によって防がれる。しかし、幾度となくその攻撃を防いできたその外套にもついに限界が訪れたのだろう。外套は鈍く光を放つたと思うと、ガラスが四散するような音を立てて消滅してしまう。

『！』

レフィーヤの口から初めて動揺したうめき声が漏れる。そして怪物はそんな彼女の動揺を見逃さない。

振るわれる尾、目の前の一人の少女に振るうには過剰とも思えるその一撃は、必ず殺すという明確な意思を以て振り下ろされようとする。

回避は不可、受け流しは不可、受け止めることはもつてのほか、もはや彼女の死は確実なものとなり眼前まで迫っている。

「せやああああッ!!」

それでもレフィーヤの闘志は消えない。彼女は怪物の尻尾に付いている鱗のわずかな隙間に向け杖の先端を突き出す。

もちろん戦士職でもないレベル3の苦し紛れの一撃がこの怪物に通用するとは到底思えなかった。

しかし、ここで諦め目を閉じてしまえば元の弱い自分に逆戻りしてしまう。それに比べたら、ここで死んだ方がよっぽどマシだ。

そんな彼女の決意とは裏腹に彼女の渾身の思いを乗せた魔杖は迫る鱗により弾かれ、無慈悲に砕け散っていく。

そして怪物の一撃が今まさに彼女の体を押しつぶそうとした、その時。

致命の一撃は、レフィーヤの目の前で停止するのであった。